

ー クラブライフが心とからだと暮らしを変えるー

「元気なとやま」をつくるためスポーツクラブによる生き生きとした暮らしを提案します。

日本におけるスポーツの大切さを伝え、サポートしていきます。



NPO法人富山スポーツコミュニケーションズ

巻頭インタビュー Interview

Jリーグ理事、(財)日本経済研究所専務理事兼地域未来研究センター長、晴れの国大使(岡山)など、数多くの「顔」を持つ傍士銘太氏。「地域活性化とスポーツ」を究める第一人者が、3つのプロスポーツを擁する富山の地で思いを語った。

(2012年1月21日(土) 富山電気ビル)

Homeはすべてを育てる

Jリーグ理事 傍士銘太

・人口減少とJリーグの拡大

少子高齢化を受けて日本の人口は減少期に突入している。1993年のJリーグ誕生以前の人口増加期には、日本のプロスポーツは野球が人気を独占し、サッカーは不人気の時代が続いた。以後20年、野球人気に陰りが見える一方、地域密着を掲げるJリーグのクラブ数は10→40に増加し、確実に日本全国に根を張りつつある。

・「スタジアム」と「競技場」の違い

「スタジアム」と「競技場」は別ものだ。もともと「競技場」とは字面通り、競技のために作られたもので、観客のために作られたものではない。屋根、照明や個席の設定、交通アクセスなどは最初から考慮されていない。

世界のサッカースタジアムに目を向けると、イングランド、スペインでは元来サッカー場として作られている。W杯やユーロの開催をきっかけにサッカー専用スタジアムとして整備されたのがイタリア(1990年)、フランス(1998年)、オランダ(2000年)、ドイツ(2006年)、スイス・オーストリア(2008年)。陸上競技場として作られているのは日本とオランダぐらいしかなく、30年ぐらい遅れていると考えていい。

Jリーグの仙台、千葉、柏、清水、浦和はいずれもサッカー専用スタジアムを有することで高い人気をもつ。プロスポーツにおける「Home Team」の存在価値は、お金をもらって観客に来てもらう事で測定できる。「来年も来たい」と思わせるか、「二度と来たくない」と思わせるか、アウェーのサポーターも含めて、お客様との「雰囲気づくり」が重要だ。

・人の集まる「装置」=スタジアム

特に2000年以降の欧州では、スタジアムはまちづくりと一体となったコンセプトで考えられるようになっている。ホテル、レストラン、ショッピングモール、オフィス、老人ホーム…多機能複合型のスタジアムが次々とお見えた。

そもそもスタジアムを訪れる人々は、試合時間以外は一般の「お客様」であり、アウェーのサポーターは「観光客」だ。Jリーグのアウェー客の経済効果は200億円ともされている。毎年必ずアウェーに出かける候補に選ばれるかどうかは重要。スタジアムはスポーツ会場である以前に、中心市街地活性化のドル箱であり、巨大な集客装置なのだ。

東日本大震災を経験した現在では、防災拠点としてのスタジアムの価値も無視できない。大人数の空腹を温かい食事で満たせる厨房を持ち、物資備蓄ができ、トイレやシャワールームも完備され



SENTA HOUJI

1955年生まれ、高知市出身。慶應義塾大学卒。Jリーグ理事。日本開発銀行(現:日本政策投資銀行)入行後、フランクフルト首席駐在員などを経て、2009年より一般財団法人日本経済研究所専務理事兼地域未来研究センター長。ご当地ナンバープレートなど地方都市活性化の提言を数多く行い、多彩な活動を展開している。



ている。避難生活の「質」を下げない上で欠かせない存在だ。

・「Home」の意識共有

20年前まで、日本にプロスポーツチームはプロ野球(NPB)12球団しか存在しなかった。今では独立リーグなども含め、40都道府県で約100のチームが活動している。

拡大のきっかけを作ったJリーグの理念は、サッカーの振興ではなく地域に根ざしたスポーツの振興にあった。スポーツによって地域の人々が「Home」の意識を共有し、「仲間→みんな」と人の輪を広げていく。自らの街を愛し、ともに発展させていくとする気持ち…「Homeはすべてを育てる」ということだ。

仙台ではボランティアを中心に「ベガルタ仙台・市民後援会」が組織され、スタジアムのゴミ減量化などの先進的な事例を作っている。スポーツを介して、市民が主人公としてまちづくりのために活躍している姿がある。

・いくつかの事例

総じて「県名=チーム名」のプロクラブは人気がない。都市固有のイメージにつながりにくく、「おらがまちのチーム」という愛着が湧きづらい。ホームタウンは、市町村単位としている所以である。

日本は平成の大合併で「昔のことは忘れない」とばかりに旧市町村の名前を消そうとするが、欧州では旧町の紋章を市議会議場に掲出するなど、昔からある町の存在を尊重している。スポーツに限らず、あらゆるシーン(場面)で街の名前や歴史に誇りを持つ風景づくりこそが「Home」の意識共有に直結するのだ。

いくつか事例を挙げると、岡山市東京事務所では電話に出る際「桃太郎のまち 岡山市東京事務所です」と名乗る。原付バイクのナンバープレートは各市区町村によって形状やデザインを自由に決めることができ、サッカーや野球のボールを模したナンバープレートは事例がないため、取り組むと面白い。地酒のメニュー表記に県名だけでなく町の名を添えることで、蔵元のある小さな町の存在が浮かび上がる。「高知龍馬空港」を発端とするご当地空港名の導入も、旅行者へのPRや街の誇りの醸成へとつながっている。

・プロスポーツの「力」

浦和レッズを例に取ると、富山がJ1に上がれば浦和から大型バス100台分(=5000人)のアウェー客が訪れる試算になる。富山を売り込むシティセールスのまたとないチャンスだ。ホームに訪れる客の何割かはアウェーに行っており、相互に行き来が深まる効果は大きい。

この講演の前に五福公園(富山市)を見学してきたが、LRTを活かした素敵なスタジアムを作り得る環境にある。プロスポーツを地域で「活用」し、人の集まりやすいスタジアムを作ることができれば、もっと面白い富山になるのではないか。徳島県では若手経営者を中心とした「徳島ニュービジネス協議会」が、徳島駅の北にスタジアムを新設する構想を提言、元旦の徳島新聞の一面を飾って大きな話題になった。富山でも「未来像」を描くことはできるはず。今後の皆さんの取り組みに期待したい。

岩瀬なでしこサッカースクール

4月14日に正式開講



4月14日(土)、富山県岩瀬スポーツ公園サッカー・ラグビー場にて、女子サッカースクール「岩瀬なでしこサッカースクール」を発足させました。

昨年10月から計5回オープンスクールを開講し、女子限定サッカーレッスンのニーズ把握を行ってきました。発足メンバーは5人と少人数となりましたが、小学生から社会人まで、幅広い層の女性たちが集まりました。

開講式では佐伯仁史理事長が「女性が気軽にスポーツに親しむ『場』を提供したいとの思いでスクールを始めました。サッカーを通じて、年代・立場を超えた友達づくりを楽しんでください」と挨拶。当初は緊張していた会員も、練習が進むにつれて徐々に打ち解け、狙い通りの「年代・立場を超えた仲間づくり」が実現している様子が窺われました。

4月28日(土)には元日本代表FW・鈴木智子さんを特別コーチに招き、オープンスクール形式で練習が行われました。なでしこJAPANやなでしこリーグ経験者を年4回招聘し、女性に合わせたレベルの高い指導が受けられることがこのスクールの特徴です。サッカー経験・技術レベルの異なる受講生を一つのスクールで指導するのは難しいことですが、きめ細かい指導と吸収力の高さに、TSCコーチ陣が「練習中に上達しているのが目に見えてわかる」と驚くほどでした。

両日ともメディアの取材があり、新たな船出をしたスクールを支えていただきました。物心両面でスクールをサポートしてくださっている協賛社各位とあわせ、厚く御礼申し上げます。

このスクールは他のTSCスクール同様、「スポーツで成長することの尊さ」を最重要視点と考えております。指導者・運営サイドとも、更なる受講生増加、スクール満足度のアップを目指して活動を行ってまいります。



スターティング「ファイブ」
4月14日



開講式で挨拶する佐伯理事長
4月14日



初回から笑顔がはじける
4月14日



テレビ局の取材を受ける
4月14日

元日本代表・鈴木智子さん
4月28日



和やかな中にも真剣な空気
4月28日



一人一人への細やかな指導
4月28日



「岩瀬なでしこ」集合写真
4月28日

2012年「初蹴り」開催



観戦ナビゲーション

新規機材導入に伴う現地試験のレポート



初心者でもプロスポーツ観戦が気軽に楽しめるよう、現地にて観戦視点を提供するサービス「観戦ナビゲーション」。このほど公益信託「富山ファーストバンク社会福祉基金」(委託者:(株)富山第一銀行、受託者:三菱UFJ信託銀行(株))により、800MHz帯を使用した新規ワイヤレスガイドシステムを新たに導入。以前のトランシーバー方式の機材と比較し、大幅に聴取環境の改善が期待されます。

富山グラウジーズ様のご協力のもと、3月31日(土)のbjリーグ・対島根スナオマジック戦(砺波市・富山県西部体育センター)にて、新規機材の実地試験を実施しました。

機材は送信機1台・マイクセット2台・受信機4台の体制。解説に松本八治氏(静岡大学男子バスケットボール部 元ヘッドコーチ)、聞き役にTSCスタッフを配し、実際の試合会場での音質などをチェックしました。

結果、大音量の場内アナウンスや歓声等にも影響されず、解説者の声が明瞭に聞き取れ、雑音等もほとんどありませんでした。大アリーナ(50m×40m)と1・2階観客席(約2500席)の全

てで鮮明に聴こえ、機器の性能は十分であることが確認されました。ハーフタイム中には富山グラウジーズの黒田社長も試聴され、「きれいに聴こえています」との客観的な評価をいただきました。

今後は、協賛金や助成金等を活用し、更なる台数の確保を進めながら本格的な実施を模索していきます。

0 TSC DIARY

2011

12月8日 サッカースクール会員ミーティング開催(アイザックススポーツドーム)

12月22日 第2回なでしこオープンスクール開催(アイザックススポーツドーム)

2012

1月7日 サッカースクール会員新年会(ビーフ館)

1月21日 TSC講演会・新年会 講師:傍士鉄太氏、県内各プロスポーツ社長もご出席

1月28日 第3回なでしこオープンスクール開催(アイザックススポーツドーム) 特別指導に江崎亜希子さん(元なでしこリーガー)

2月18日 第4回なでしこオープンスクール開催(岩瀬スポーツ公園健康スポーツドーム) 特別指導に鈴木智子さん(元日本代表)、白鳥綾さん(元なでしこリーガー)

2月28日 U12、デベロップスクールに特別指導 竹原靖和さん(ツエーゲン金沢ヘッドコーチ)

3月17日 第5回なでしこオープンスクール開催(岩瀬スポーツ公園健康スポーツドーム) 特別指導に中地舞さん(元日本代表)、江崎亜希子さん(元なでしこリーガー)



編集後記

巻頭でお伝えした講演の後、傍士銘太さんはJリーグ公式WEBサイトの連載『百年構想のある風景(114)』にて、「県民チーム」と題したコラムを発表されました。「県民チーム」が三つもあるのに、なぜ盛り上がらないのか?との問い合わせに対する回答は、ぜひコラムでご確認ください。

3月には高岡市議会で永森茂議員(富山サンダーパーズ社長)が「市のミニバイクのナンバープレートをご当地デザインに」との提案を行い、話題になりました。同月の富山県議会

では石井隆一知事が「富山空港への愛称導入の是非を検討する」との意向を示し、シティプロモーションの重要さが県内でも認識されつつあることを印象付けました。

2014年度末の北陸新幹線金沢開業を控え、富山では長年の悲願が成就する歓迎ムードの一方、ストロー化現象や並行在来線の存続問題に対する懸念も芽生えています。「スタジアムは巨大な集客装置」…傍士さんの言葉は、スポーツと社会を積極的にリンクさせることで、多くの問題を解決するきっかけになることを示唆していると改めて感じました。



NPO法人富山スポーツコミュニケーションズ

事務局

〒930-0818 富山市奥田町 12-41-203

Tel.Fax.076-439-9277

E-mail info@toyama-sc.com

URL <http://www.toyama-sc.com>

Vol.10 発行日：2012年6月1日

[発行] NPO法人富山スポーツコミュニケーションズ

[発行人] 佐伯仁史

クラブライフが心とからだと暮らしを変える